

柳井市探索記——国木田独歩——

神野 幸人

(会員 鎌倉市台)

独歩が藤坂家で過ごした柳井の当時の様子を詳記している、左記の如し。



国木田独歩と藤坂屋

この藤坂屋の向かいに右側の建物は明治の文豪国木田独歩一家が居住した家である。明治二十七年(一九一四)又十八は家狭しどもに、柳井市福野の中山医院からここに移住した。その頃独歩は大分県佐伯から引いて来て、文筆までの一ヶ月間ここに居た。その頃の昔をたして「夏三三」(一)「かざるの記」(二)などがあり、独歩は、柳井は忘れがたいところである。なお、この建物は「夏三三」の挿話、独歩が書簡に「国木田独歩の居る所」であった民謡「国木田独歩の居る所」によって、昭和四三年に建てられた。

置土産(三角餅)

餅は円形が普通なるを故意と三角に捻りて客の眼を惹かんと企みしやうなれど、実は餡をつつむに手数の工夫不思議にあたりて、三角餅の名何時しかその近在に広がり、この茶店



の小さいに似合ぬ繁盛。しかし餅ばかりでは上戸が困るとの若連中の勧告もありて、何はなくとも地酒一盃飲めるやうにせしはツイ近頃のことなりと。

戸数五百に足らぬ一筋町の東の外に石橋あり、それを渡れば商家でもなく百姓家でもない藁葺屋根の左右両側に建並ぶこと一丁ばかり、其所に八幡宮ありて、その鳥居の前からが、片側町、三角餅の茶店はこの外にあるなり。前は青田、青田が尽きて塩浜、堤が高くして海面こそ、見えぬ、間近き沖には大島小島の趣も備はりて、先づ眺望には乏しからぬ好地位を占むるがこの店繁盛の一理由なるべし。



↑
藤坂家
独歩記念碑
(置土産)



其処に八幡宮ありて、その鳥居の前からが片側町。三角餅の茶店はこの外にあるなり。

……店の主人幸衛門と、店人的お絹お常、客人の八幡宮神主の伴、油売りの吉次……

吉次軍夫となりて彼地に渡り一稼大きく儲けんと出郷の折、お絹お常への置土産にと買い求めた、鼈甲の櫛二枚を渡しそびれ、夜半八幡神社の賽銭箱の上に置く。あの二人が平時のやうに朝まだき薄暗い中に参詣するならば多分拾うて呉れるだろうと神頼み。

翌朝、神のお授けと二人は大喜び、かれこれ三年して

吉次の病死の知らせ、遺言に百円をお絹に渡すようにと、幸衛門の出す手をお絹は押遣つて。

「私は確かにうけとりました。吉さんへは私からお礼を言います。どうかそれで吉さんの後を立派に弔ふて下さい。更で私からお頼みますから」

※藤坂家の二人の少女にハンカチを送ろうとしたのは独歩であつたが吉次に作り変えた。

※吉次のモデルは長州奇兵隊の松岡信太郎、あるいは、松下村塾の富永有隣といわれる。

独歩は、前は青田、青田が尽きて塩浜と記している。山陽本線の柳井津駅(現柳井駅)が開業したのが、明

治三十年九月二十五日（山陽本線が徳山まで延長した日）であるから、現在の山陽本線や並行する国道の所も田圃であったのだろう。

当時、塩田が盛んで塩焼く煙が所々に立ち昇っていたという。

堤が高くして海面こそ、見えね とあるが、藤坂家は少し上がった所にあるのに海が見えない程の高い堤とは何んであったのか？長さ、幅、高さ、防波堤？



独歩旧宅裏庭より



独歩旧宅裏庭垣根より



独歩旧宅展示品

当時、交通の要所であった宇品駅は明治二十二年（一八八九）四月一日開設された広島までの二、四kmで、昭和六十一年（一九八六）九月三十日廃止され、線路の痕跡も無いという。今の広島港だという。

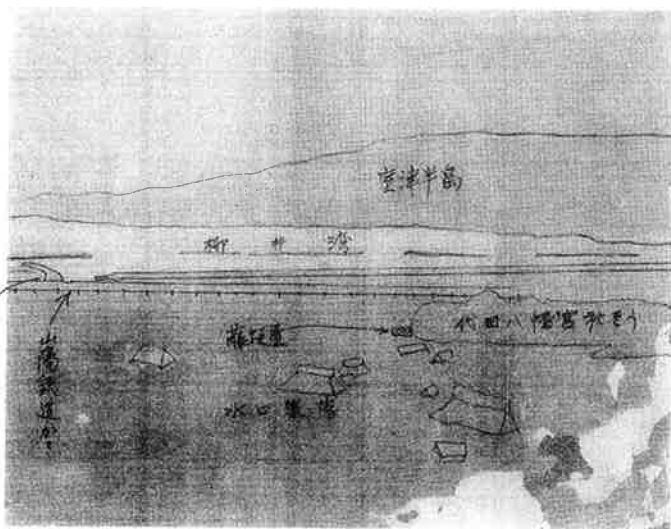
〔平成十五年六月二十五日記〕



山陽本線 柳井港付近 藤坂屋はすぐそばだ



大島大橋より柳井遠望



岸ノ下港か?
(独歩の船舶利用港)

(明治33年8月)